学ぶ

学校の動物飼育続けて

「命の学習」地域で支援

鳥インフルで逆風

児童が小学校で飼うニワトリやウサギなどの「学校飼育動物」が姿を消しつつある。毎日の世話に手間がかかることや、各地で発生する鳥インフルエンザへの懸念で飼育を断念する学校が増えているためだ。命の大切さを子供のうちに身をもって学ぶ機会を何とか続けられないか。地域の住民や専門家が力を合わせ、解決策を探っている。

昨年4月、川崎市内のある市立小学校の校庭から飼育小屋が撤去された。以前はニワトリやウサギを飼っていたが、鳥インフルエンザの心配や小屋の衛生環境の悪化で、近年は飼育をやめていた。教頭は「小屋が老朽化して適切な管理が難しく、飼育継続をあきらめた」という。

同市では2012年度に全公立小の8割超にあたる92校で飼っていたが、16年度は6割の68校に減少。飼育総数もウサギが194匹から129匹、ニワトリが39羽から9羽に減った。

一部の地域の話ではない。大阪府が管轄する小学校は10年度、7割近くが飼育していたが、16年度には45%に。鳥インフルエンザの影響のためか、特に鳥類の減少が目立つ。東京都八王子市の公立小には03年度に136羽いたニワトリが16年度には10羽まで減った。

学校飼育動物はまさに「絶滅」の危機にあるが、飼育継続の道を探る動きもある。

東京都中野区立鷺宮小学校。休み時間になると、4年生4人が校庭の飼育小屋に入った。病気を持ち込んだり広げたりしないよう、4人は使い捨ての手袋にマスク、長靴を身に着けている。チャボ1羽とウサギ2匹を抱き上げて囲いに入れると、慣れた手つきでフンを掃除し水やエサを取り換えた。

ウサギの「ラッキー」を抱えた中垣恵未奈さん（10）は「あったかーい」と笑顔。横塚憲君（10）は「大変だけど、小屋がきれいになると動物が元気になってうれしい」と話す。

同校では毎年、4年生全員が交代で動物の世話にあたっている。週末や夏休みは当番を決め、児童が保護者とともに対応。年末年始は近所の住民も手伝う。渡島郁弘校長は「世話をしてなついている動物に子供たちは強い愛着を持つようになる。気持ちを落ち着かせる効果もあるようだ」と話す。親子で動物と接する機会を持てることに保護者からも肯定的な意見が多く聞かれるという。

昨年2月には、大切に育てていたチャボの「ボス」が死んだ。獣医にみてもらったところ、原因は老衰。「お別れ会」を開き、みんなで見送った。各地で鳥インフルエンザへの懸念が広がっているが、「医師の診断に加え、普段からきちんと世話してきたため、不安の声は出なかった」（渡島校長）という。

思いやりの心 はぐくむ効果

ペットの心理的効果などに詳しい中島由佳大手前大学准教授の話　学校での動物飼育が児童の心理的発達に与える影響を調べたところ、「気持ちの落ち込んだ友達に電話する」など、思いやりの気持ちを高めることが分かった。学校がより楽しく、居心地のよい場所になるという効果も明らかになっている。

理想的なのは、動物飼育で学ぶことの目標を作って学校全体で共有し、教育課程に組み込むやり方だ。動物アレルギーの児童がいたとしても、エサの準備や飼育日誌の記録でかかわるといった工夫が可能だ。

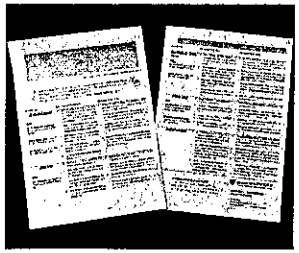
動物が死んでしまった場合は、お別れ会を開いたり手紙を書いたりして、気持ちを外に表す機会を持つといい。命と向き合うこうした体験も、学びになるのではないか。

動物の世話をする児童（東京都中野区の鷺宮小）

正しい知識で飼育しようと、獣医師会と連携する地域もある。

愛知県獣医師会は2006年から、獣医が動物の特徴や病気の症状などを解説する「ふれあい教室」を希望する小学校で開いている。15年度には「学校飼育動物協力獣医制度」を創設。相談を随時受け付けるほか、今年1月には動物の飼い方などを分かりやすく解説した教員向けハンドブックも出版した。

昨年6月にふれあい教室を開いた南知多町立大井小学校は動物飼育の長い歴史を持つが、飼育を続けるかどうかを巡り職員間で議論になったこともある。動物が死んだときの子供への影響などを考えたためだ。最終的には命の大切さを学ぶ得難い機会として継続を決定。獣医がいつでも相談に応じてくれることも支えになった。同校の皆川崇真教諭は「弱い生き物に接することで、相手を思いやる気持ちが子供たちに芽生えている。友達に対しても感情的にならなくなった」と効果を実感する。



獣医師会「正しい知識を」

出前授業や解説書作成

栃木県獣医師会は毎月「みんなのがっこうのどうぶつ」と題したニュースレター＝写真＝を発行。昨年12月、各地で鳥インフルエンザが相次いで発生した際は号外を出し、冷静な行動を呼びかけた。群馬県獣医師会など、地元の教育委員会から委託を受け、「学校獣医師」として活動しているところもある。

日本獣医師会学校動物飼育支援対策検討委員会の処愛美副委員長は「小屋を清潔に保ち、動物が野鳥や野鳥のフンと接触しないようにするなどの措置をとれば、病気を過度に心配する必要はない」と助言。そのうえで「困ったことがあったら、近くの獣医師に相談してほしい」と話している。

（ライター　高橋恵里）